

## 応援団について（その2）

なぜメンバーを引き付けるか？アンケートの分析

グドゥルン・グレーヴェ

### はじめに

ジャパノロジーの前提は、日本文化圏に所属していない外部の人間として、日本のあらゆるもの・こと・文化や社会などの現象に関心を持つことである。このような広い分野は一つの学問分野に纏められるか、何を方法論に使えばいいのかなど幾つかのジレンマが潜んでいる。しかしここでは方法論について論じるのではない。むしろそのジレンマを念頭におきながら、ある資料を紹介したい。1987年に初めて来日してから日本の多くの大学で活躍している、黒いガクランを着ている男性のチアグループである応援団が私の興味を引いて、近頃これを研究の対象にした。強い好奇心をもって、なぜこのような、日本にしか存在しない不思議な団体が現れたのか、なぜ現在に至るまで存続しているのか、その団体はどのようなものなのか、などという問いの答えを探している。方法としては経験的事実を分析することである。ただ日本の独自性を強調して、袋小路の「日本人論」<sup>1)</sup>に貢献するつもりはない。応援団を独立した現象としてではなく、むしろ歴史的・文化的な文脈の中で考察したい。従来のジャパノロジーは文献だけを資料として用いたが、ここでは一つのフィールド・スタディーを試みて、応援団員に回答してもらったアンケートの分析と解釈を試みたい。

前稿ではなぜ応援団に関心が湧いたかを説明した上で、応援団の歴史や時代の変遷に伴うその変化、そのイメージや自己理解、そしてその実際の行動についての検討を試み<sup>2)</sup>、応援団の活動の本来の目的から、現在における存在理由までの関連を辿ってみた。本稿ではその続きとして、さらに詳しく応援団の動機・理念や実際の活動などについて取り上げよう。そのために、1999年夏に行ったアンケートを分

析する。

応援団リーダー部（指導部）についての、役に立つ参考文献などはほとんど見当たらないので、この団体の今日の状況を把握するために、アンケート（添付資料参照）を作成して、幾つかの大学のリーダー部に直接、様々な質問を出した。リーダー部やそのメンバーの本当の目的、考え方、背景、理想などが明確になると期待した。時間的制約などの状況により本アンケートの宛先は関西の5大学に限ったので、この結果を日本全国の大学応援団に当て嵌めることはもちろんできない。そして、アンケート用紙82通を様々な大学応援団へ送ったが、返ってきたのは26通にすぎないので、それを基礎にして応援団についての普遍的な主張をすることは不可能である。しかし、ある程度団員の考え方などについて特定の傾向が浮かんでくるにちがいない。そのアンケートのデータに基づいて、応援団の様々な特徴について考察したい。

ところで、送付した回答用紙の内、3分の1弱しか回答がえられなかったという事実もまた一つの回答になると考えられる。アンケートに答えるのは面倒ということ以外に、団員は情報を外にあまり漏らしたくないという推論も可能だろう。つまり、応援団というのはある意味で秘密結社のようなものであるという印象が強くなった。すでに述べたように、応援団についての、情報源となる参考文献などはあまりない。情報があまりないこと、そしてアンケートへの答えがあまり多くないこと、この二つの事実は容易に一つの推測を可能にするのではないか。つまり、応援団のメンバーは団内の状況・事情をあまり外に知らせたくないということが考えられる。しかし、このアンケートの回答者は、大体質問に明らかに率直に答えてくれたことも否定できない事実である。

もう一つの事実をあらかじめ断っておく必要がある。つまり、周知の通り、アンケートの質問はある程度誘導的であることが避けられないので、質問を作成した者の最初のイメージや偏見を反映しかねないが、自由記述のスペースによって可能な限り客観性を保つことを心がけた。

回答のあった大学と回答数は次の通りである。同志社大学1、関西大学9、関西学院大学5、京都大学1、立命館大学2。それに、大学名を記入しなかった団員8名である。

以下、特徴的な点を中心に、アンケートの結果を紹介したい。分かりやすくするために、質問の通し番号をつけておく。

### イメージと現実

1. 何故応援団に入ったかという質問に、用紙に理由として考えられる10の選択肢を出して、個人にとって重要だった順に、答えに番号を付けるようにした（最も大きい理由には1を付けて、2番目の理由に2を付けるなど）。「大学で声をかけられて断れなかったから」という理由に、最も多い10名が1を付け、「応援団に入っている先輩に誘われたから」というところに7名が1を付けた。2番目に大きな理由としても「大学で声をかけられて断れなかったから」（6名）、そして「大学で声をかけられていいかもしれないと思ったから」（4名；2名がそこに1を付けた）、が最も多く挙げられた。8名が、先輩に誘われた、もしくは大学で声をかけられて断れなかった、というところに高い番号を付けながら、同時に「大学で声をかけられていいかもしれないと思ったから」という答えに1から4の間の番号を付けた。つまり、誘われて「いいかもしれない」と判断した人もいるが、驚くべきことに誘いを断れないという、圧力を感じる状態にも抵抗するのではなく、むしろ「いいかもしれない」とある程度納得した人もいる。まとめて言えば、かなり多くの方は、自発的な意思をもって判断をした上ではなく、先輩もしくはキャンパスでヘッドハンティングをしている上級生の団員によって誘いの声をかけられて団員になることを決心したと考えられる。場合によって、

先輩への憧れも団員になりたいという気持ちを湧かせるらしい。京大のメンバーは、「格好いい先輩がいて、自分もそうなりたと思った」と、入団の理由を述べた。

それ以外に入団の理由として高い番号（1-4）が付けられたのは「動作が格好いいから」（11名）、「ガクラン・はかまなどが格好いいから」（9名）、そして「就職に有利だから」（8名）が挙げられた。つまり、ビジュアルな面も重要とされ、応援団の「格好よさ」が明らかにメンバーを引き付ける。「就職に有利だから」という観点はむしろマイナーである。最も大事な理由として1を付けた人がおらず、2名が2、4名が3、2名が4を付けた。つまり、就職での有利はよく入団の理由の一つにはなるが、最も重要な理由ではない。

驚くべきことに、「スポーツに興味があって、試合のときに自分の大学のチームを応援したいから」という理由はほとんど挙げられなかった（それぞれ1名が2、3、そして4を付けただけである）。というのは、応援団の基礎である「スポーツに対する興味」、そして応援団の主な目的の一つであるはずの「試合の時に自分の大学のチームを応援する」ということはその段階でほぼ完全に念頭に置かれていない。入団するのは普通は入学直後であるので、自分もその大学の一人であるという感情・連帯感がまだはっきりしていないのは不思議ではないが、応援団の主たる活動の一つが入団への決意にほとんど影響しないのは注目に値する。

2. しかし、団員になってから、応援団の活動の中で何が重要とされるかという質問には最初の質問と比べて多少異なった傾向が見られる。明らかに「試合の応援活動」が最も多く挙げられた（10名が1、6名が2、4名が3という番号を付けた）。それ以外に重要とされたのは「仲間との触れ合い」（5名が1、4名が2、6名が3番を付けた）、そしてチャリングフェスティバルなどのような「演舞祭」（5名が1、6名が2、4名が3番を付けた）である。それ以外のパフォーマンス（卒業式・入学式・学園祭でのパフォーマンス、3名が1、5名が2番を付けた）そして昼休み中などのキャンパスでのパフォーマンス（4名が2、2名が3番を付けた）

はそれほど重要と思われていない。パフォーマンスの種類を考えるとこの差は驚くべきではない。演舞祭などというところでは、応援団が中心になっているのに対して、大学の催しものでは、応援団のパフォーマンスは付加物にすぎないので、それほど重要と思われていないのは当然であろう。

まとめて言えば、試合の応援、そして仲間との触れ合いは明かにメンバーにとって、活動の中心となっている。この事実は、ある程度予想できた結果であろう。

3. 団員になる前の応援団に対するイメージを聞くと、13名は「怖いと思った」という答えにマークを付けたのが目立つ。「憧れがあった」、そして「全然イメージがなかった」という答えにそれぞれ5名がマークをつけた。すなわち、怖いイメージが圧倒的に強いのである。怖いと思う人がそれにもかかわらず入団するのは不思議に思われるが、ある程度強制されてメンバーになる人、そして誘われただけでなんとなく断れなかった人もかなりいることもまた推測できる。

4. 団員になってからイメージはどのように変わったかという質問に、その怖いイメージが入団してから変わっていないと答えた人もまた4名いる。まとめて言えば、様々なプラスやマイナスやはっきりとしたプラスもしくはマイナスにはならない発言があった（大体それぞれ3分の1ずつ）。プラスの、肯定的な答えは例えば「やらなければ分からない良さがあることに気がきました」、「かっこういい、がんばっている」、「やりがいのある活動だとおもった」、「きびしいが、やりがいがある」、「極くまれにすごくない人もいた。でも基本的にみんなすごすぎる」などのような、応援団を高く評価する熱狂的な返事があった。マイナスの、否定的な答えと言えば、「一回生の時は辛くてしんどくてやめたくてたまらなかったが、今後、楽しいことがあるかもしれないと思う」、という答えにはまだ希望が多少含まれているが、「こんな団体が存続してよいのか?」、「報われない」、「やっぱりきびしく、理不尽なことも多くある」などという答えは完全に挫折を感じさせるものである。そして「けっこうだれにでもできる」という返事もあるものの、「応援団は相手との闘い

ではなく、自分との闘い。自分が応援に対して満足できれば勝ちであり、満足できなければ負けである。本当に不思議なクラブだと思う」という、闘いの観点を強調する答えもあった。

5. では、応援団に入って、最もいいことは何かという質問に、9名が友人が増えること、3名が達成感・充実すること、2名が人脈・人間関係の幅が広がること、2名は有名になること（「他人にすぐ顔をおぼえられること」など）、そして2名は「無駄な」大学生活に刺激ができることを挙げた。それ以外に「自分に自信がもてるようになった」、「しんどいことをのりきって感動できる」、「声が大きくなった」、そして狡猾にも「単位をおとしても言い訳ができる」など、様々な答えがあった。まとめて言えば、友人・人間関係が多くの団員にとって最もプラスの点であろう。

6. 逆に、団員になって最も辛いことを聞くと、6名は上下関係の厳しさ（先輩への気使い、礼儀、怒られること）、6名は練習の厳しさを挙げる。他に、時間に余裕がないこと（3名）、お金がかかること（2名）、授業にでられなくて卒業が危ないこと（2名）、そしてさらに物理的な問題として、水分の補給ができないこと（2名）、腰痛（1名）などが挙げられる。最も具体的・印象的な答えとして、「練習、接待、合宿、応援、おこられること、足がくさくなる、体もくさくなるetc.」、「肉体的且精神的に限界近くまでしぼられること」、そして「おこられること何度あるか分からない（星の数ほどある）」などがある。

つまり、精神的・物理的な辛さがほぼ同じ程度で嘆かれる。明らかに、応援団の活動ではメンバーは精神力や体力をかなり使い果す、また経済的にも時間的に負担のかかる活動でありながら、その代償として人間関係が広がったり、友人が増えたりすることがプラスと考えられている、という結論が可能であろう。

7. 応援団について考えると、連想される・結びつけることのできる16の概念や形容詞を取り上げて、その中から団員がどれが応援団に相應しいかという、複数回答の質問を出した。それで、メンバー自身の、応援団のイメージがさらに明確になった。

以下、マーク回数による順番である。

「厳しい」	23回
「伝統的」	23回
「つらい」	18回
「規律ただし」	17回
「権威主義的」	12回
「服従」	12回
「男らしい」	11回
「満足感を与える」	10回
「格好いい」	9回
「楽しい」	9回
「たくましい」	9回
「保守的」	7回
「暴力的」	6回
「勇気」	3回
「没我的」	2回
「正義の味方」	1回

もちろん、マークをつける言葉は限定されているので、その質問はある程度誘導的であるのはいうまでもないが、様々な事実が浮かんできた。例えば、応援団活動の厳しい、辛い面がさらに強調された。「楽しい」と思う者はやはりあまり多くない。そして、規律ただしさ・権威主義・服従を含む「伝統的」な面も、メンバーが強く意識している。「満足感を与える」ことは「正義の味方」や「没我的」な面より多く連想されるので、応援団は利己心なく学校を守るため、学校のチームが試合で勝つためだけに努力するのではなく、自主的な、自分の存在権のあるクラブとして自分を理解していることが明かになった。たしかに、戦後の応援団が警察のように、自分の学校の学生を外からの、他大学の学生やチンピラなどによる暴力から守ったり、試合が無事に行なわれるように保護を与えたりする必要性は現在、完全になくなったので、この結果は驚くべきものではない。「勇気」をもつ必要性もなくなったが、6回マークをつけられた「暴力」は服従・規律という伝統を確保するためにたまに必要となると思われるだろう。その代わりに、外見に現れる「男らしさ」そして「格好よさ」という形が意識される。

## 応援団の原則と上下関係について

8. 個人の意見では、応援団の原理・原則は何かという自由記述の質問に、回答者はキーワードを取り上げて場合によって短く説明した。次のキーワードが述べられた。

礼儀	9回
厳しい上下関係を守る（挨拶、敬語を使う）	7回
伝統	7回
応援をする	4回
根性	3回
規律	3回
服従	3回
回りを・学校を・ムードメーカーとして場を盛り上げる	3回
大声を出す（気合いのこもった）	3回
全力投球	2回

それ以外には「努力」、「団道具」、「滅私奉公」、「忍耐」、「規則」、「格好いいところをみせる」、「質実剛健」、「まじめ」、「和：応援団の内的、学内的な意味で」、「律：仲が良いだけでは、他のサークルと同じ」が取り上げられた。2つの詳しい答えを引用しよう。

「プレーしている選手に勇気と力を与える事である。その為には応援団員が全力投球する事が絶対不可欠なのである」。そして、「礼儀を重んじることによって自らを鍛え、また、体力面だけでなく精神面をも鍛えることによって、人生について考え、一人前の人間として巣立つ」。

答えに出たキーワードは3種類に分けることができる。1つは、団内だけに關するキーワードである、例えば「規律」、「礼儀」など。それらは大体メンバーの間でだけ關係し、特に団内の活動・生活に重要な役割を果たす。もう1つの種類は、応援団が表に出る、他の学生の前で活動する場合に關係のあるキーワードである、例えば「応援する」、「場を盛り上げる」などがある。そして、「全力投球」のような、両方の面が関わってくる答えの種類もある。このような分け方をしてみると、団内の生活を決めるキーワードだけを取り上げた者は10名、応援団の外の活動に影響を果たすキーワードだけを取り上げる者は

3名、残りの11名の答えには両方の面のキーワードが入っている(2名は答えをしなかった)。つまり、表に出る応援団の応援活動より、団内の生活・人間関係を定めるルールなどのほうが重要とされるという結論が可能である。「礼儀」、「上下関係」、そして「伝統」が群をぬいて最も多く挙げられたこともさらにその結論を強調する。

9. 後輩として、先輩に対する義務・やらなければならないことの詳細を聞くと、これまでの印象がより強くなる。つまり団内の上下関係がどれだけ重要であるかということがさらに明らかとなる。次のことが述べられた。

挨拶をする (大声で、きっちり立ち止まって)	
(「外で出会ったら『ちわー、失礼しまーす』など」)	11回
指示に服従する	8回
礼儀	7回
自分から進んで仕事をしたり、荷物をもったりする	
(「水をくむ」・「先輩の手間をはぶくようにする：先輩の荷物を代わりに持つなど」)	6回
接待をする	4回
連絡をする (「電話での翌日の行事について」など)	2回
敬語の使用、言葉遣い	2回
先輩の前のドアを開ける	2回
上級生のうしろを歩く	1回
耐える	1回

現代日本の社会ではもう殆ど見つかりにくい、厳しくて、封建制の社会秩序を思い出させるルールが続出している。後輩たちの負担・義務が最も重い。次のような表現、「失礼がないように、細心の注意を払う(戸につくなど)」によると、後輩は絶えず先輩の行動を注意深く見て、必要な時に素早く手伝いに近寄ってこななければならない。命令を受ける際は、考えずに従うべきである(「とりあえず言われたことはやってみる。意味を考え、必要性を判断するのはまず自分がやった後」)。要するに、意味のない命令が出されても従うべきであるとされる。たった1才年上もしくは1学年上の先輩にさえ

もこれほど無条件に屈服するのは非常に驚くべきことに思われる。「他の人々の前で必ずその人をたてる」、つまり服従することは先輩が面子を保つ機能にもなるが、ある団員によると、後輩が先輩に対してすべきことは「敬意を払う(ただし尊敬し得る人にのみ)」ことだという。したがって条件もある。先輩はある程度努力して、下級生の尊敬を得るすべを心得なければならない。もう一人の答えによると、後輩は先輩に対して「下からのプレッシャー」を与えるべきである。だから、後輩は完全に無力なのではなく、ある程度自己の意志を表現できることは考えられる。

なお、後輩の先輩に対する振る舞い方のルールに関しては、ある観察をしたことがある。このアンケートとは関係なく、2回ともほぼ同じシーンをビデオに撮影した。1999年5月西宮スタジアムで行われたフラッシュチアリーダーコンテストで、観客として現れたリーダー部の男たち(どこの大学の応援団であったのかは不明)が客席につく際、まず先輩が座る。ゆっくりくつろいで、5、6秒経ってから、手で肩越しにさりげなく合図をすると、後の列に待っている後輩たちがお辞儀をして席につく。そして更に後に立って待っている下級生が合図を受けてからお辞儀をして座る。1998年、立命館大学の応援団のメンバーとインタビューを行った際も似たような場面があった。私に席を勧めてから、団長が腰をかけて、合図をすると2回生の団員が「失礼します」と言ってお辞儀してから座る。そして1回生の二人が同じく「失礼します」で座る。このように、団内生活には先輩・後輩の振る舞いを細かいところまで決める規則がある。

10. 先輩として、後輩に対する義務・やらなければならないことの詳細を聞くと、26人の内に14人しか答えなかった。何も書かなかった人は一回生として、その質問にまだ返事できなかっただろう。次のようなことが述べられた。

「一つ一つの活動にモチベーションを与えてやる」

「応援団における規則などを教える」

「応援団を良くしよう、良くしていこうと思わせる」

「自分の言うことを聞かせる」  
 「助ける・教える・放っておく」  
 「緊張感を与える」  
 「団にふさわしい人間に育てる」  
 「後輩が応援団らしくない行為をした時は厳しく叱る」  
 「指導する・しごく・少し楽しい思いをさせてあげる」  
 「挨拶をさせる・礼儀を学ばせる・気合いを入れる」  
 「一緒にくったらメシおごる」

一人は「支配。言葉・暴力での圧政」と書いたが、これは最初に書いた「暴力以外での圧政」の「以外」を後で抹消したものである。単なるミスであるかどうかは判断できないが、暴力を振るうのは望ましくないが、実際にはたまに「暴力での圧政」も必要になる、と解釈することは可能であろう。

まとめて言えば、先輩として、後輩に対する義務・やらなければならないことは、指導する・礼儀などを教えるなど機能的な役割を果たす以外にはモチベーションを与えるなどという重い責任がある。そのために教育上の能力や技術が必要である。「しごく」・「厳しく叱る」・「育てる」などという言葉を知ると、権威的な構造が明らかとなる。下級生は何も知らない子供のように扱われる。厳しい扱い以外に、2人が「楽しい思いをさせる」という任務を挙げたが、これも子供扱いと呼べるだろう。

けっきょく、先輩は神様のようなものであると思っても、実際に責任が重い。神様のように尊敬されるために、かなりの努力が必要と言えよう。一緒に食事をしたら、先輩は後輩の分まで払わなければならないので、経済的な負担も重い。いわゆるあめとむちを用いて、バランスよく下級生を指導しなければならない。1年次は後輩としての活動を経て、2年次から急に立場が変わり、先輩としての責任を果たすのは容易ではないだろう。メンバーのインタビューで聞いた話によると、立命館大学の応援団では、1回生は3回生によって、2回生は4回生によって指導されるという担当システムがある。それにしても、2回生は4回生によって後輩扱いされても、1回生に対してはある程度先輩の役割をはたさなければならないだろ

う。その役割の二重性は切り替える能力を求めらるう。

11. 後輩として、先輩に対する権利・してもいいことを尋ねると、7人は何も答えなかった、そして8人は、そのようなものはないと答えた。「なし・絶対服従」、「精一杯に頑張ることだけ」などと書いている。6人は次のように後輩の立場の甘い利点を挙げる。「移動の際、電車代、タクシー代を出してもらえる」・「かわいがられるようにする」・「あまえる」・「堂々とおごってもらう」・「酒の場で絡む」などのような回答があった。

5人は、後輩は礼儀のルールを守りながら、先輩に相談・助言できる、という権利を述べて、次のように答えた。「こうした方が良いのではないかと、下級生のいないところで言う」・「いろいろなことを聞く」・「応援団を良くするための意見」などのことがある。「個人の意見の主張」をする権利を挙げた者もいるが、他の団員は「かげ口のみ」することができると書いている。

それ以外は「非通知設定の電話をとらない」・「連絡する」・「練習等の欠席を申し出ること」と様々なことが述べられたが、それらは権利というより義務のようなものであるように思われる。まとめて言えば、おごってもらったり酒場で絡ませてもらうこと以外、後輩には、礼儀をわきまえながら相談したり・意見を出したりするという条件付きの権利があっても、それらの権利は義務であるようにも解釈できるだろう。つまり後輩の立場はかなり弱く、先輩に対して服従したり礼儀を守ったりして、全力を尽くさなければならないという印象が強い。

12. 先輩として、後輩に対する権利・してもいいことは何かを聞くと、16人は答えを書かなかった。一回生であるから、答えられなかっただろう。2人は「特になし」と書いて、このようなことがあるのを否定している。それらの団員は下級生に対する行為を権利というより、むしろ義務として理解しているに違いない。3人はそれと反対に、「何でも可」・「理性が及ぶ範囲のこと」・「原則として暴力以外全て」と書いて、権利が様々であることを認めるが、条件付きの権利である。暴力を使ってはい

けない、そして理性をもって行動しなければならない。

4人は下級生に対するやさしい行動を権利として述べる。「おごること」・「度が過ぎない程度にあちらこちらに連れ回す」・「かわいがる」などという返事がある。

3人は自分の権威を強調するが、同時に後輩たちの尊敬をなくさないように努力して、権威をふりすぎるのは良くないと表現している。「威厳をもつ」・「度が過ぎない程度にしごく・服従させる」・「しかるべき時にはきちんとしかる。自分のやってきたことで意味があると思うことはさせる」という回答がある。

メンバーのインタビューで聞いた話によると、立命館大学の応援団員は後輩を呼び出して自分の部屋を掃除させることもある。その代わりに、ご飯に招待する習慣がある。

つまり、先輩であることは困難な、バランスをとる演技のようなことである。威厳や尊敬をなくさないように、先輩は下級生に対して理性を守りながら、厳しさと優しさのバランスを保つのが重要であるように読み取れる。

13. 先輩として、後輩に対して絶対にしてはいけないことを聞くと、16人は答えなかった。これもまた、その質問に答えられない一回生だろう。

残りの10人の内、5人ははっきりと暴力（「たたく、なぐる、ける」）を述べた。3人は「逃亡させない」と書いているが、これは、先輩は後輩を応援団をやめさせてはいけないという意味であろう。

それ以外は次のような答えがあった。「考えもなく無茶なことをさせる」、「いじめ、たかり」、「意味もなく怒らない・私情をもちこまない」、「金をかりる、ものをとりあげる・自分がされたことのない事」、「無礼な行為」、「行きすぎた肉体的弾圧・人権侵害」、「鬼畜行為全般」があった。

回答を見て、矛盾を感じることもある。つまり、弾圧・暴力・いじめなどをしてはいけないと同時に、逃亡させてはいけない、とのことである。やめたいと思っている下級生を言葉で納得させて止めることができない場合、弾圧以外に方法がないと思えば先輩はジレンマに落ち込むだろう。

もう一つ、注目すべきことがある。ここに詳しく述べた「してはいけない」ことは何故挙げられたのかという疑問である。つまり、以前これらのことは先輩が後輩に対して実際にやったという解釈は可能であろう。

「自分がされたことのない事」は上下関係の本質を反映している。自分がされたことのない事を下級生に対して絶対にしてはいけないという、先輩の権利を制限するルールがあると同時に、自分が先輩によってされた事は下級生に対してもしてもいい、という暗黙の了解が読み取れる。

14. 後輩として、先輩に対して絶対にしてはいけないこと（失礼なこと）は何かという質問に、例えば「先輩の許しを得てないこと全て」、「敬意を払わないこと」、「裏切る、無視する、酒をこぼむ」、「なめた口をきく、なめた行動をする（例：おならをする）、いうことをきかない」、「先輩にちょっかいかける」、「礼儀を忘れる（ため口で話しかけるなど）」、「あいさつをせずに横を通る」、「礼儀をおこたる」、「名指しで呼ぶこと」、「先輩の御指導に対する反発、反抗的な態度、先輩の前で軽々しい態度やだらけた飲食」、「考えられる限り全て」、「退部」、「腕組み、だらしのないところを見せる」などのような答えがあった。また、「礼儀」、「あいさつ」、「敬意」や「規律」という言葉がよく現れる。先輩の後輩に対する行為規則に、それらの概念は全く出ない。先輩と後輩の間に、お互いにしてもいいことに関してもしてはいけないことに関して完全に違うことが述べられた。純粋な上下関係が保たれることがいっそう明らかになった。

その上下関係は次のような2つの例によって描かれている。『ザ・シゴキー実録応援団』という小説に、ある後輩が先輩に教えてもらったところによると、「一年から四年というのは、単なる学年ではない。一年奴隷、二年平民、三年天皇、四年神様という階級制度が、厳然として存在するということがあった」<sup>3)</sup>。

『嗚呼！！花の応援団』<sup>4)</sup>という1996年の映画では、次のような、より極端な例えが表現される。応援団員の4年生は神様、3年生は人間、2年生は奴隷、1年生はゴミである、と、2人の学生が応援団

について話している。

15. 先輩・後輩の間の一番重要なルールを聞くと、「礼儀」が10回に、「服従（絶対服従）」が4回、「あいさつ」が4回、上下関係が3回、「敬語」や「規律」が1回ずつに挙げられている。その他に「相手を信じること」、「ある程度の親密さをもつ」、「あまり親しくならない、そしてあまりに嫌いにならない」、「先輩の荷物をもつ、接待をする」、「幹部は一回生などによく昼飯などをおごる」などがある。一人は「後輩は先輩が先輩というだけでどうして上なのかを理解する。先輩は後輩の手本となるよう、自分を律してただエバルのではだめ」という意見を出して、上下関係には互いの努力が要ることを強調している。先輩と後輩を同じレベルに置いて「互いに尊重し合うこと」と書いたのは一人だけである。

#### 自分の応援団の特徴や部活の日常

16. 応援団の歴史について何か知識があるかどうかを聞くと、17人は何も答えなかったり、何も知らないと書いたりした。残りの9人の回答はあまり役に立たない、簡単なものが多かった。例えば「昔はよくけんかをしていた」、「きびしかったらしい（もともと）」、「学校側ともよく衝突しているが、今では信頼できる関係にある」、「短く書けるものではない。あなたの想像以上に歴史は深い」などがあった。関西大学の団員は「80年ほど続いている」、「1922年春四月にうまれたと思う」と書いて、関西学院大学の団員は「1947年に応援団が完成（リーダー部のみ）、1954年に吹奏楽部、1966年にバトントワリング部が編入された」と詳しく述べた。

立命館の団員一人は真剣に応援団の由来について考えた上で、次のように書いた。「私の考えるところでは、日本の武士や侍の持っていた“大和魂”が明治時代から軍人にうけつがれ、それを現代にうけつぐのが応援団だと思います。軍人が歌う軍歌のように、学生が自分たちの学校のために歌った歌が応援歌となったのだと思います」。その団員は明らかに江戸時代の“大和魂”を持った武士、明治時代の軍人と応援団員の間につながりを見ている。ただ、昔の愛国心が愛校心に変形したというわけである。

無論、このようなアンケートで、応援団の歴史についてなどのような複雑な質問にそれほど詳しい答えは期待できないが、回答の全体を見ると、団員の歴史意識はあまり強くないと言えよう。一人だけ、自分の大学の応援団の、何年にどの部分が結成されたかという事実を挙げた（関西学院大学）。そして一人は応援団の由来について書いた（立命館大学）。多くの団員にとっては自分の応援活動の歴史を考えるより、活動の現在のほうが重要であると言えよう。

17. 応援団と言え、多くの人には「押忍」（「おす」という、後輩だけが先輩に対して使う叫びの表現が思い浮かんでくるだろう。しかし団員に、「押忍」をどういう意味で、どういう気持ちをこめて使っているかと聞くと、答えは大学によって異なる。同志社大学では使わないらしい（「同志社にかぎって押忍は言いません」）。関西大学でも関西学院大学でもあまり用いないと答えた団員が少なくない（「応援団を表すことばとして、しかしあまり使いすぎないよう」）。京都大学では「わかりました」という意味で使うらしい。

立命館大学の団員は、「押して忍ぶ、つまり言われたことに対して分かりましたという返事」、そして「“押忍”という言葉は男の心のありかたの意味が込められていると思います。しかし、普段使うときは、ただの返事という感じに使っています」と答えた。大学名を名乗っていないある団員は「文字通り押して忍ぶ、けじめをつけること」、そして「意見を述べる前と後での気合入れのため」と述べた。

東京の六大学では法政大学でのみ使い、会話の前と後に必ずつけると言われる。例えば「オス、本日は晴天であります、オス」など<sup>5)</sup>。

18. 「押忍」以外に応援団ではどのような特別な言葉を使うかという質問に、「した」（「ありがとうございました」の略）、「します」（「失礼します」の略）、「ちわー」（「今日は」の略）、「ごっつあんでした」（「御馳走さまでした」の略）が挙げられた。関西学院大学では「失礼します」を「せいやす」という短縮形で表現する。立命館大学では「ごめんやす」を別れる時の挨拶として使う。挨拶を言いやすくす



るために、そして効率良く早く言えるように、短縮されるのが目立つ。

19. 応援団の活動に必要なお金はどれぐらい負担になるかという質問に、「全然負担になっていない」という答えに10人(800円~1000円)が印をつけた。その内、1回生か2回生だと名乗った者は6人。「少し負担になっている」には11人(1500円~3万円)、「かなり負担になっている」には5人(3万円)が印をつけ、その内明かに3人は3回生である。上級生になるにつれて、経済的な負担が大きくなるにちがいない。後輩の飲食代、移動の際の電車代・タクシー代などを出すことがあるからであろう。先に述べたように、立命館大学の団員によると、先輩は後輩を呼び出して、自分の部屋を掃除してもらってから、褒美と一緒にご飯を食べる時にお金を出すことがあるらしい。また、後輩は先輩のガクランを受け継いで、もう着れない状態になるまで着るので、服装代はそれほど要らないらしい。ちなみに、擦り切れたガクランを着るのはまた硬派のファッションであり、団員の自慢になるようである。

経済的な負担に関しては、応援団の団道具の購入費や試合へ行く際の交通費には、大学の方から援助が出るとのことである。

20. もし、もう一度選択できるとすれば、また応援団に入りたいと思うかどうか、という質問に、13人が「分からない」に印をつけた。その内1人は理由として「まだ幹部を経験してないので」と述べた。はっきりと「いいえ」に印をつけたのは10人である。理由としては例えば「バカをやるのにはきつい年令になってきた」、「下級生時代の辛さは2度と味わいたくないから」、「もういいです」、「忙しすぎて、勉強ができない」、「普通の大学生活を送る」などがあつた。その内、ほとんどの理由は明かに辛さを感じているのでもう入りたくないからである。「はい」に印をつけて、また応援団に入りたい者は3人だけである。理由は「憧れだから」、「今はここが一番合っていると思う」、そして「他にやることがないから」である。しかし26名の内、10名、つまり3分の1以上は、もう一度選択があれば、団員になりたいというの目立つ。

21. もし、卒業前に応援団をやめたければ、どう

なるかを聞くと、一人だけが「簡単にやめれる」というところに、半分以上の人(15名)が「十分な理由があれば、やめさせてもらえる」というところに印をつけた。10名は「説得されてやめさせてくれない」と答えて、理由としては例えば「とりあえず人数」、「甘くないから」、「必要とされているから」、「自分の決意を曲げる事は応援団精神に反するから」、「やめたら学校にいられない」などがあつた。この事実は、応援団といえば、そんなに簡単に退団できないという推測をある程度裏書きすると言えよう。退団自体は応援団精神、「押して忍ぶ」という基本的な考え方と矛盾しているだろう。しかし、半分以上の者は「十分な理由があれば、やめさせてもらえる」と思っているのは、その厳しい精神が以前と比べて多少緩くなったことの証拠となっている。

22. 「やめたいなあ!」と思ったことがあるかどうか、と聞くと、「一度もそう思ったことがない」というところには一人も印をつけず、「ほとんどない」というところに4名だけが印をつけた。多くの団員(15名)は「ときどき」と挙げて、理由として「勉強ができないため」が最も多かった(5名)。「練習がきびしい」、「きびしい上下関係」、「やたらえらそうな先輩、試合中の無関心な客」、「雰囲気が悪すぎる」、「理不尽なことで怒られたとき」、「夜遅くまで残らなければならない」、「2年生まではつらいことの方がさすがに多かった」、「やりたいことができないから」などという理由もあつた。「頻繁に」やめたいと思った団員は7名、例えば「おこられるから、後輩がへばい(たよりにならない、なさない)」、「おこられてしばかれたとき」、「授業の妨げになる、お金がかかる」、「理不尽や不可能な事が多すぎるから」などが挙げられた。団員には良い経験だけがあるのではなく、フラストレーションもかなりたまるといえる。特に、忙しすぎて勉強できないこと、そして理不尽なことがやめたい気持ちを湧かせるようである。3名も「理不尽」という言葉を挙げて、それは確かに先輩が意味のない、理不尽な命令を出して、後輩は文句や批判を言えず、その嫌がらせとしか思えない命令にも従わされるということを目指すだろう。上下関係では、下にいる者は抵抗できないので、意地悪が可能になる。

23. 先輩・後輩の間の厳しいルールについて、どう思うかと聞くと、(複数可) 1名だけが「好き」というところに印をつけた。理由としては「厳しいルールこそ応援団独特の味をだしているから」。8名はそのルールが「好きでも嫌いでもない」。9名は「そのまま守るべきである」と思って、理由は例えば「厳しいルールがなければ、応援団の活動が不可能になってしまう」、「応援団の伝統である厳しい規律であるから」、「おれがやってきたから」、「守ろうとしてもかなり1年ずつゆるんでいます」などがあつた。3名だけが「多少緩めるべきである」と思って、「今後一回生がついてこないかもしれないと不安になる」、「いきすぎたと思うことがあるから」などという理由がある。しかし8名にとってはそれらのルールが「しんどい」。他に「後輩の時はうとうしい、先輩になると快感」などという意見もあつた。

要するに、ルールをきついと思っている団員が多にもかかわらず、それらは応援団の特徴や本質として守るべきだとされている。そして3名はルールは守ろうとしても段々と緩くなるという傾向を認めている。

24, 25. 次の2つの質問によって、政治的な立場を明かにしようとした。日本の政治や歴史に関心があるかを聞くと、14名が「あります」、8名が「少しだけあります」、そして4名だけが「全然ありません」というところに印をつけた。「右翼」は「保守的・国粹的な思想傾向」、「左翼」は「社会主義・急進主義的な思想傾向」であるとすれば、どちらの思想に近いかを聞くと、8名はそれについて「考えたことがない」、8名は「右翼でも左翼でもない」、「右翼」や「どちらかという右翼」は7名、「左翼」や「どちらかという左翼」は3名である。「右翼」的考え方に近いという者は「左翼」的考え方に近いという者より僅かに多いが、26名の内の7名だけで、「応援団は右翼っぽい」という仮定は当たっているとはいい難いだろう。全体的に団員の内に、歴史や政治に対する関心を持っている人は比較的に多いにしても団員一人一人が真剣に政治的な立場をとるまでには行かないと思われる。

26. 応援団の活動の時間的な負担を尋ねると、団

員は平均週6回、毎回約1～5時間集まって、その内の練習時間は週約5～6回、各回約1時間である。時間的負担はかなり大きいと言えよう。以上質問6や20で明かになったように、メンバーが卒業をできるかどうかという不安をかかえているのは当然であろう。

27. 練習以外に、毎日の「部活」としてどのようなことをするかと尋ねると、試合・応援・行事の準備、団室の掃除、ピラ配り、デモンストレーション、小道具の準備、看板かき、雑用、待機、総務、庶務、一回生としゃべるか先輩と雑談、作戦会議、いろいろな人との交流を深める、OBへの手紙、ホームページをつくるなどが述べられた。その中で一人の答えから、何回生にどんな任務があるかということが分かる。「1・2年生道具の整備、3年生は運営会議、4年生は神様」と、上下関係が現れる。

28. 応援団と授業がかさなった場合、どうするかと聞くと、17名は「場合による」と答えた、例えば「テストや語学、必修、専門優先、でも試合応援が最優先」。5名は「授業優先」とし、4名だけが「応援団優先」(「せざるを得ないでしょ」)とする。26問の時間的負担を考えれば、場合によって「応援団優先」になることが多いに違いない。応援団活動と並行して、普通の学生として授業に出席し、必要な勉強をすることは困難だろう。

29. それぞれの応援団の中のどんな役職についているかを尋ねると、大学によって役名が多少異なる(例: 関西学院大学では「指導部長」、立命館大学では「リーダー部長」という)、そして基本的に上級生にだけ役職があることが分かる。それらをあげるより、立命館大学の団員をインタビューして分かった役職組織を述べよう。4回生は幹部である(団長、副団長、リーダー部長)。団長は全ての応援団の指導者であり、その下に、リーダー部長、チアリーダー部長、そして吹奏楽部長がいる。2・3回生には統制、管理、責任者がいて、総務、渉内、渉外(他大学応援団との連絡)、司会、旗手、鼓手や会計がある。1回生には役職がついていないようである。要するに、応援団が細かく構造化された組織であるのは明かである。

30. どのような特別の任務をはたしているか、を

尋ねると、太鼓をたたき、リーダーをふる、旗を持つ、団道具(旗、太鼓等)の移動や整備(1回生)、などが述べられる。

31. まわりの大学生は応援団に対してどのようなイメージを持っていると思うか、という質問(複数可)に、16名ずつが「変だと思っている」や「怖いと思っている」というところに印をつけた(「変態・マゾ」)。11名は「不思議だと思っている」、9名は「右翼っぽいと思っている」、7名は「格好いいと思っている」、6名は「男らしい」、5名は「見ていやになる」というところに印をつけた。つまり、団員は全体として、自分たちのイメージは学生の間で、変わった、そして怖いものとしてあまり良くないと思っている。

32. 応援団での活動について、まわりの人たちはどう思っているか尋ねると、両親は反応を示さないが10名、8名は両親が賛成し、同じく8名は両親が反対している。賛成する理由としては「就職に有利だから」、「人格形成の場」などが述べられて、反対する理由は例えば「勉強にさしつかえる」、「人に言えないらしい」があった。5名の場合に友人が反対している。理由は例えば、活動で忙しすぎて一緒に遊んでくれる時間がないこと、変なイメージをもっていること、そして授業に出られないので友人として心配していることである。8名の場合に友人が面白がったり、格好いいと思ったりして賛成している。つまり、まわりの人は活動の利益を認めたり、面白がったりする一方、活動の時間的負担が大きすぎるので束縛され、勉強の妨げになることを心配しているようである。

33. 自分が所属している応援団と他の大学の応援団との違い、そして自分の応援団の特徴を尋ねると、様々な興味深いことが述べられた。

関西学院大学の団員は、「人数の多さ、勧誘活動の熱心さ」、「私の所属している応援団は漸進的だと思う」、「スマートで、現代的。各回生の仲がいい」などと書いた。

関西大学の団員は自分の応援団について、「少しおもしろい」、「とても礼儀が厳しい。気合いが入っている」、「一回生は四回生(団長他幹部)と話せない。一、二回生はOBと話せない等」、「風格が違う。歴

史・伝統が長いから」、そして3名は「きびしい」と述べた。要するに、関西大学の応援団は「漸進的」と言われる関西学院大学のそれよりはるかに厳しいようである。

京大の応援団もそれほど厳しくなさそうである。「上級生、下級生との壁があまりない。礼儀etc.はあるが、下級生が、こうしたいと言えば上級生が考え、方針を変えることもある」と団員は書いている。

立命館大学の団員は自分の応援団を強く誇りに思っている。「気合いが入っている。演舞が激しい。気合は関西一、演舞の激しさは東京の大学にも優れると思う」、そして「気合い、礼儀、厳しさ、楽しさなど全ての面で日本一だと思う」という自慢が書いている。

同志社大学の団員は、「ビジュアル的、白ランをきる。全部で人数も7人しかいません。OBがちょーはばきかしまくってる。あとは立命館と元はそうちがわれないけど京大より上です」と書いた。つまり、それぞれの応援団の団員には自分が所属している応援団は他大学の応援団と比べてどこが優れるかなどを強調して、ランク意識が強いと言えよう。

同志社だけは黒いガクランだけではなく白いガクラン(白ラン)も着ている。それは、ある口伝えの情報によると、1982年に起ったあるシゴキ事件<sup>6)</sup>に起因している。それをきっかけに、当時の学友会は応援団の解散を求めたが、自治会には、元々黒いガクランを止めさせて、暴力的体質が改まるまで、白いガクランを着せるというアイディアが浮かんだそうである。それはある意味の罰もしくは反省方法とされた。また、応援団の総会も自治会によって監視されるようになったらしい。最初に「白ラン」は屈辱的に感じられたが、現在では同志社の応援団の独特なファッションとして愛着があると思われる。数年前から、応援団は総会の監視からも白ランを着る命令からも解放されたが、黒いガクランを着ることは再び許可されても、行事の時に白ランを着ることが多いらしい。

#### おわりに

これまでに様々な方法を使って応援団についての

認識を得ようとした。このアンケートを分析したり、インタビューを行ったり、応援団の活動を直接観察したりして、現在まで幾つかのことが浮き彫りになった。それは、以前持っていたイメージと実際の形は異なっているということである。応援団を初めて考察の対象にした段階では、応援団は堅苦しくて恐い団体であると思った。そしてポリシーがあって、応援団はわざとその軍国主義的・右翼的・過激的なイメージを保っているという印象を出発点にした。確かに応援団には堅苦しくて恐い側面もある一方、団員は自分を皮肉な目でも見たり、自分を笑いの対象にしたりする時もある。ただ、後輩が先輩に直接声をかけられないなどという規則までもあると分かって、上下関係は思ったよりはるかに厳しく予想を上回った。なお、応援団を軍国主義的・過激な団体として見做す根拠がないことも分かった。応援団は多少そのイメージを見せびらかしたがという印象が残っているが、そこにはポリシーも打算性もないようである。

上下関係やガクラン、激しい動作などが現在にいたるまで型として残っていると言えよう。しかし、その型に、新しい動機が加わったようである。それはM. チクセントミハイが使いはじめた「フロー」または「自己目的的经验」という概念を当て嵌められるだろう。それはチクセントミハイによると「最適経験の基本要素は、それ自体が目的であるということである。たとえ初めは他の理由で企てられたとしても、我々を夢中にさせる活動は内発的報酬をもたらすようになる」<sup>7)</sup>。今まで得た応援団についての認識を活用し、この団体の活動をこのように理論に当てながら更に考察を深めるのは今後の課題としたい。

このテーマについて探究しながら、もう一つの認識に辿りついた。それは、日本の現象を外から（ヨーロッパなどの文化圏から）持ってきた規準ではか

れば、「応援団は右翼っぽい」などというイメージや偏見を訂正するのは不可能であるということである。つまり、他者理解は自己理解（自分の規準を疑問視する）なしでは非常に危険であり、誤解が生じやすくなる。このように、他者理解と自己理解の相関関係はジャパノロジーのもう一つの重要な前提となるだろう。

## 注

- 1) 日本人論については杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫 1995年、25頁を参照。そして Peter N. Dale: *The Myth of Japanese Uniqueness*, Routledge, London 1988, p.I を参照。
- 2) 「応援団について—キャンパス・ライフに不可欠の団体か奇妙な遺物か—」『立命館言語文化研究』第14巻2号 2002年9月27日 187-197頁。
- 3) 坂口拓史『ザ・シゴキ—実録応援団』時事通信社 1987年、30頁。応援団を非常に暴力的な団体として描いている不思議な小説である。あとがきに「本書の内容はすべて事実に基づいている」と書いてある。著者の動機は次のことで明かになる。応援団は「実社会では、もっと陰湿で人間性を無視したイメージが横行している。連帯感など、もちたなくてもない不毛の社会環境も多い。本書が読者の皆さんに、何らかの問題提起の一石となれば幸いである」(253-254頁)。その著作の発行年からすると、1980年代に、応援団は現在と違って、まだまだ恐ろしいシゴキの現場であった。現在にいたって、応援団は比較的落ち着いた、平和的なグループになったと言えよう。
- 4) 1976年のものの再映画化のナンセンス・コメディ映画である。同じタイトルのマンガに基づいている。
- 5) 東京六大学応援団連盟OB会編『応援団・六旗の下に』シュバル1984年、214頁。
- 6) 『京都新聞』1982年5月23日。「(略) 練習していた応援団(略)の上級生数人が入団したばかりの一回生に、「練習態度が悪い」と約十時間、木刀、竹刀で殴りつけ、腰、手足などに一週間以上のけがを与えるシゴキ事件が発生した」と書いてある。注3で述べたように、このような不祥事は1980年代にときおり様々な大学の応援団で起ったが、近頃は聞かれなくなった。
- 7) M. チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社1996年、85頁。

## 資料

### アンケートのお願い

私は日本の大学生にネイティブスピーカーとしてドイツ語を教えています。そこから、日本の若者、つまり大学生の文化への関心がわいてきました。大学生はどのようなものに興味をもっているか、授業以外にどのような活動をしているかなどを研究したいと思っています。日本の大学に来て、一番おどろいたのは、応援団リーダー部の存在でした。メンバーは比較的少ないと思いますが、なぜ、学生はこのような厳しい団体に入るのか、団体にはどのような規則があるのか、そしてなんのために頑張っているのかなどということを知りたいのです。このような団体はヨーロッパなどにはありません。日本独特のものであると思います。それについて色々知りたいので、そのまま調べようとしたのですが、役に立つ参考文献などがほとんど見つかりませんでした。ですから、アンケートを作って、リーダー部の皆さんに直接、いくつかの質問をだすことにしました。それによって、偏見が排除され、応援団リーダー部の本当の目的、考え方、背景、理想などが明確になると期待しています。忙しい時にご面倒ですが、できれば具体的に、そして正直に次の質問に答えて頂ければ幸いです。回答用紙に記入の上、そのまま添付した封筒に入れて個人的に送り返して下さい。私はその結果を自分の個人研究のために活用したいと考えています。どうかよろしくお願い致します。

#### 質問

1. 何故、あなたは応援団に入ったのですか？理由として、あなたにとって重要だった順に番号を付けて下さい。(一番大切なものには「1」をつけて、2番目大切なものには「2」…のようにお願いします)
  - なんとなく憧れていたから
  - ガクラン・はかまなどが格好いいから
  - 動作が格好いいから
  - 就職に有利だから
  - スポーツに興味があって、試合のときに自分の大学のチームを応援したいから
  - 厳しい規律にあこがれがあるから
  - 応援団に入っている先輩に誘われたから
  - 大学で声をかけられて断れなかったから
  - 大学で声をかけられていいかもしれないと思ったから
  - エールなどによってストレスを発散できると思ったから
  - その他： \_\_\_\_\_
2. 応援団の活動は色々ですが、あなたが、重要だと思う順に番号を付けて下さい。(一番大切なものには「1」をつけて、2番目大切なものには「2」…のようにお願いします)
  - スポーツ試合の応援活動
  - キャンパスでのパフォーマンス (昼休み中など)
  - 卒業式・入学式・学園祭でのパフォーマンス
  - 演舞祭 (例えば：チャーリングフェスティバル)
  - 練習
  - 合宿
  - 仲間との触れ合い
  - その他： \_\_\_\_\_
3. あなたは応援団に入る前、応援団に対してどのようなイメージをもっていましたか？
  - 憧れがあった
  - 全然イメージがなかった
  - 不思議だなと思った
  - 怖いと思った
  - その他： \_\_\_\_\_

4. 応援団に入ってから、そのイメージはどのように変わりましたか？

---

---

5. 応援団に入って、一番いいことは何ですか？

---

6. 応援団に入って、一番つらいことは何ですか？

---

7. 応援団に相応しいことばにマークをつけてください。(複数可)

- |                               |                             |                                  |
|-------------------------------|-----------------------------|----------------------------------|
| <input type="radio"/> 楽しい     | <input type="radio"/> 伝統的   | <input type="radio"/> 権威主義的      |
| <input type="radio"/> 厳しい     | <input type="radio"/> 保守的   | <input type="radio"/> 規律正しい      |
| <input type="radio"/> つらい     | <input type="radio"/> 暴力的   | <input type="radio"/> 勇気         |
| <input type="radio"/> 満足感を与える | <input type="radio"/> たくましい | <input type="radio"/> 服従         |
| <input type="radio"/> 格好いい    | <input type="radio"/> 正義の味方 | <input type="radio"/> その他： _____ |
| <input type="radio"/> 男らしい    | <input type="radio"/> 没我的   |                                  |

8. あなたの意見では、応援団の原理・原則は何ですか？

(キーワードを取り上げて、短く説明してください)

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

9. 後輩として、先輩に対するあなたの義務・やらなければならないことは何ですか？

(次の六つの質問には具体例で答えて下さい)

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

10. 先輩として、後輩に対するあなたの義務・やらなければならないことは何ですか？

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

11. 後輩として、先輩に対するあなたの権利・してもいいことは何ですか？

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

12. 先輩として、後輩に対するあなたの権利・してもいいことは何ですか？

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

13. 先輩として、後輩に対して絶対にしてはいけないことは何ですか？

1 \_\_\_\_\_

2 \_\_\_\_\_

3 \_\_\_\_\_

14. 後輩として、先輩に対して絶対にしてはいけないこと(失礼なこと)は何ですか？

- 1 \_\_\_\_\_
- 2 \_\_\_\_\_
- 3 \_\_\_\_\_

15. 先輩・後輩の間の一番重要なルールを取り上げてください。(複数可)

- 1 \_\_\_\_\_
- 2 \_\_\_\_\_
- 3 \_\_\_\_\_

16. 応援団の歴史について何か御存じですか？短く書いてください。

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

17. 「押忍」をどういう意味で、どういう気持ちをこめて使っていますか？

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

18. 「押忍」以外にあなたの応援団ではどのような変わった言葉を使いますか？

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

19. 応援団の活動に必要なお金はどれくらい負担になっていますか？

- 全然負担になっていない       少し負担になっている
- かなり負担になっている      (一カ月平均約\_\_\_\_\_円)

20. もし、もう一度選択できるとすれば、また応援団に入りたいと思いますか？

- はい (理由: \_\_\_\_\_)
- いいえ (理由: \_\_\_\_\_)
- 分からない

21. もし、卒業前に応援団をやめたければ、どうなるでしょう？

- 簡単にやめれる
- 十分な理由があれば、やめさせてもらえる
- 説得されてやめさせてくれない  
(その理由: \_\_\_\_\_)

22. 「やめたいなあ！」と思ったことがありますか？

- 頻繁に (理由: \_\_\_\_\_)
- ときどき (理由: \_\_\_\_\_)
- ほとんどない
- 一度もそう思ったことがない

23. 先輩・後輩の間の厳しいルールについて、どう思いますか？（複数可）
- 好き（理由： \_\_\_\_\_）
  - 好きでも嫌いでもない
  - このまま守るべきである（理由： \_\_\_\_\_）
  - 多少緩めるべきである（理由： \_\_\_\_\_）
  - しんどい
  - その他： \_\_\_\_\_
24. 日本の政治や歴史に関心がありますか？
- あります
  - 少しだけあります
  - 全然ありません
25. あなたの政治的な立場ですが、「右翼」は「保守的・国粹的な思想傾向」として、「左翼」は「社会主義的・急進主義的な思想傾向」とであるとすれば、あなたはどちらの思想に近いですか？
- どちらかという右翼             右翼
  - どちらかという左翼             左翼
  - 右翼でも左翼でもない           考えたことがない
26. あなたの応援団は週に何回集まりますか？一日何時間ですか？
- 答え： 週約\_\_\_\_回，一回ごと約\_\_\_\_時間。  
その内の練習時間は週約\_\_\_\_回，一回ごと約\_\_\_\_時間。
27. 練習以外は毎日「部活」としてどのようなことをしますか？
- \_\_\_\_\_
- \_\_\_\_\_
28. 応援団と授業がかさなった場合、どうしますか？
- 授業優先
  - 応援団優先
  - 場合による
29. あなたは応援団の中の役職についていますか？
- はい（ \_\_\_\_\_ という役職）
  - いいえ
30. あなたは応援団の中で特別の任務を果たしているのですか？（例：旗を持つ）
- はい（ \_\_\_\_\_ という任務）
  - いいえ
31. まわりの大学生は応援団に対してどのようなイメージを持っていると思いますか？（複数可）
- 憧れがある                             怖いと思っている
  - 不思議だと思っている             格好いいと思っている
  - 変だと思っている                    イメージがない
  - 右翼っぽいと思っている           見ていやになる
  - 軍国主義的だと思っている       見ていいなあと思っている
  - 男らしい                                 その他： \_\_\_\_\_



32. あなたの応援団での活動について、まわりの人たちはどう思っていますか？

ご両親：

- 賛成 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 反対 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 その他： \_\_\_\_\_

ガールフレンド：

- 賛成 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 反対 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 その他： \_\_\_\_\_

その他の身近な人、例えば友人 ( \_\_\_\_\_ )：

- 賛成 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 反対 (理由： \_\_\_\_\_ )  
 その他： \_\_\_\_\_

33. あなたの所属している応援団と他の大学の応援団との違いは何だと思いますか？

(あなたの応援団の特徴は何ですか?) その理由は何ですか？

\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_  
\_\_\_\_\_

34. お差し支えなければ、あなたの所属している大学の名前などを教えて下さい。

\_\_\_\_\_大学 \_\_\_\_\_学部 \_\_\_\_\_回生 (年生)

どうも有難うございました。